



マレーシアとシンガポール

さとう かつひこ
佐藤 克彦

PSIAアジア太平洋地域事務所長

PSIAアジア太平洋地域事務所は、昨年12月にマレーシアのクアラルンプールからシンガポールに移転しました。これによって、私は丸3年間のマレーシアでの生活を終え、シンガポールで新たに生活を始めることになりました。事務所を移転した理由はいろいろありますが、移転後7ヶ月経ったいま考えてみると、この判断はよかったと思っています。

2003年の暮れにクアラルンプールで仕事と生活を始めたときは、もちろん初めての経験でもありましたが、直ぐにさまざまな問題に遭遇しました。その多くは海外赴任者の多くが体験することだったと思いますが、「勘弁してよ」と言いたくなるのが偽らざる気持ちでした。その後、徐々に慣れてコツもつかめてきましたので、問題の未然防止や早期解決もある程度できるようになりましたが、決して簡単なことではありませんでした。

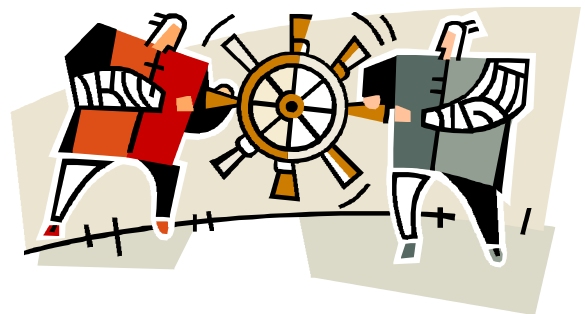
そんな折に、シンガポールの加盟組合AUP Eの書記長が、彼らの組合の建物に、空きスペースがあるから移ってこないか、と打診してきました。そこで、実際に現地を見せていただき、移転を即断しました。そして、同じところにあった東南アジア小地域事務所と統合して新しい事務所を開設し、2007年1月からここで仕事をすることになりました。新事務所ではAUP Eのスタッフの協力も得な

がら仕事ができ、大変ありがたく思っています。

マレーシアとシンガポールは1965年のシンガポール独立までマレー連邦という一つの国でしたから、いろんな共通点もありますが、違いも多く見られます。マレーシアといえばマハティール、シンガポールといえばリークアンユーという強力な指導者がこれまで両国の政治を握ってきたことは周知のことですが、この二人はいわゆる「開発独裁型政治」の強権的リーダーとして、経済政策の成果とは裏腹に、欧米諸国からは人権の面から厳しい批判も受けてきました。

労働運動も例外ではなく、戦闘的な活動家は厳しい弾圧によって抑圧され、穏健な活動のみが容認されてきました。したがって、どちらも労使協調あるいは政労使協調の性格が強くと表れています。しかし、この外見的な協調型も、よく見るといろんな問題を内包しているように思われます。

マレーシアの場合は、民間企業の組合は公共部門の組合よりやや活動的で、NGOもかなり活発に活動しています。公共部門の組合の活動は低調で、労働組合権も大きく制約されています。2004年にMTUC主催のメーデーに行ってみると、参加者が200~300人程度の屋内の集会で、数人のゲストや組合幹部の長々とした話を聞かされるだけなので、すっかりくたびれてしまいました。それ



が、あるときクアラルンプールの中心地で屋外の集会が開かれているので、驚いて見たら、アメリカのイラク攻撃に反対し、イスラムの同胞を支援する「官製」の集会だったようでした。

シンガポールは政労使協調の典型といってよいでしょう。NTUCの主催する会議やパーティーには、必ずといってよいほど政府や使用者の代表が参加し、あいさつをします。私が初めて参加した大きなパーティーは、前NTUC書記長の退任祝いでしたが、そこにリークアンユーをはじめ首相その他多数の大臣や経営者団体の幹部、外国公館の大使などが来ていたのには驚嘆しました。

シンガポールに移って間もなく感じたことは、NTUCの共済事業というのが非常に幅広く展開されていることでした。保険、住宅、出版、貯蓄、高齢者および子供のケア、技能訓練（語学、コンピューター等々）、カード、遊戯クラブ、スーパーマーケット、フードコートなど実にさまざまな事業が運営されており、市民生活に広く浸透しています。NTUCだけでなくAUPeなど個々の組合の事業もさかんで、まさにCooperative Societyといった感じがします。

シンガポールは東京23区と同じぐらいの広さのいわゆる都市国家で地方自治体というものはありませんから、行政や議会の仕組みは大変シンプル

です。国会はリークアンユーが創った人民行動党の一党支配といってよい状態ですから、国会の論戦などということは期待できません。いわばテクノクラート支配の国家といえると思います。このため国家の管理が強い窮屈な国という印象を持つ人も多いのですが、実際に住んでみるとそれほどではありません。（ある意味では日本もシンガポール以上に長い一党独裁政権国家に近いといえるかもしれませんが。）

小さな国の中に中国系、インド系、マレー系など多数の人種と民族が混在して暮らしているのもシンガポールの特徴です。言語も共通語(Business Language)が英語で学校では英語で授業を行います。マンダリン(北京語)、タミール語とバハサ・マレーシア語は母語(Mother Tongue)で人種・民族別に一つ選んで母語の授業の時間にだけそれを習います。母語の一つバハサ・マレーシア語は国語(National Language)にもなっていますが、母語の授業でしか習うことはできません。ですから基本的に全てのシンガポール人は英語プラス母語の2ヶ国語を話します。

このような特殊な国に住んでみると、国家の発展、自由と民主主義、労働組合のあり方などということを改めて問い直して見なければならぬと思います。